

スイスに学べ！市長選挙に思う。

休日の朝、ラジオに耳を傾けながら新聞に目を通してたりすると、いやが上にも明日の、市長総選挙の話題が飛び込んで来る。が、年々下降線を辿る投票率の背景に、立候補者が公示されてからの選挙活動の内容が先進諸国に比べてかなり厳しい物がある為に、投票する我々にとつては、いざ投票日が近づいても、誰に入れたらいいのか、働く社会人にとつてそのより所となる情報を得にくいとの指摘がラジオ放送の中にあった。

公示後はメディアへの登場に大きな制限がされ、選挙カーも台のみとか・（静かでもいいとも思えるが（笑））誰も候補者の街頭演説を一人一人じっくり聴く時間の余裕がある訳でも無いのに、いざ公示されて各メディアから「明日は投票日です！」と薦められても、既に数日前の新聞を引っ張り出した所で投票すべき”決め手”となる材料はどこにも見当たらず、インターネットにすらその情報は無い。前回の総選挙の際にも、各政党のHPは公示から選挙終了までの間、閉鎖されていたとか。

この情報社会の中で、いくら公平を期す為とは言え、判断に値する情報を与えてくれない以上、政治には無知なこの僕は（本当はこんな事言つてはいけぬのだが）更に投票への足を遠ざけてしまわざるを得ない。

確か中学の社会科の教科書で知ったと思うが、スイスには議会というのが存在せず、法律の改正等は全て国民の「直接投票制」で決定されるとか記憶している（この辺記憶が定かじゃないので、誰かご存知の方、メールお待ちしております。教えてください）第1次大戦のはるか以前より「永世中立国」を宣言して、平和のシンボルのイメージもするスイスだが、それにもそこに至るまでには血にまみれた民族の歴史があった。

国土の大半を険しい山に囲まれたこの国では、農業も十分には発達せず、国男達は国境を越えて隣国へと”出稼ぎ”に出ざるを得なかった。金で雇われて戦場で戦う”傭兵”としてである。

ある時、A国とB国が戦争へと陥り、戦場で戦いを交える事になった。そして戦つたのは、互いの国の兵士では無く、それぞれの国に雇われたスイス人だった。そして双方が全滅した。

同胞の死を悲しんだスイス国民は、この悲劇を二度と繰り返すまいと、「永世中立」を宣言した。だが、それだけでは元々産業の無い国の事。奇麗言だけでは食べて行けない。新たな産業を興さねばならない必要に迫られた。しかしナポレオンすらも大いに悩ませたアルプスの山を命懸けで越えて他国へと輸出の出来る品物となると、馬にも沢山載せられる小さな、且つ極力利益の大きな物でなければならぬ。

そこで辿り着いた結論が「腕時計」だった。

今なお名ブランドとして世界の憧れを一身に受けるスイス製腕時計。でもその背景には、血塗られた過去を二度と繰り返すまいという、スイス人の意地が今も深く込められている。

勿論、今の日本の繁栄も、戦後の混乱を支えてきた多くの人達の上にある事を忘れては
ない。今度は今、この時代に生きる僕たちが、各々の立場と能力の中で、次の世代に残
せる何かを真剣に考えさせてくれる機会を求める為にも、更なる情報の公開の機会を求め
たいと思う次第である。

「遥かな夢に焦がれず今日の時めきをその胸に」楽しい事だけでは無く、時として自
分を悩ませる事すらも真正面から冷静に見つめて、明日の自身を生きるパワーへと繋いで
いけたらいいと、心から思う。

(97年4月19日)

「負けるな！有森」―一時引退―決断に想う事―

マラソンの有森選手が、選手のプロ活動を認めないJOCの方針に対して、遂に決断を下した。

ソウル五輪の頃より、日本人選手と外国人選手の間では、同じメダルを獲得したにしても、自国においての待遇が信じられない程大きく広がってしまう様になった。勿論全てがそうだと言う訳では無いが、僕の記憶にあるだけでも、88年ソウルの重量挙げで金メダルを獲得したトルコの選手は、一生の生活が保証されたも同じ年金の支払いが保証されたとし、同大会の韓国選手も、金メダル獲得者にはかなりの金額が政府から支払われた。カール・ルイスに至っては最早説明の必要は無い。旧東側の選手にしても、当時では金メダル獲得者はそれでもう一生の生活には困らないとすら言われた。冷戦終了後のそれらの地域ではどうか分らないが、こと先進諸国の中で見ても、日本人選手のメダル獲得者（＝国民的ヒーロー）に対しての生活の保証は、決して満足できる物では無い様な気がする。

いくら「アマチュア・スポーツの祭典」とはいえ、それに出場するだけでも、選手は日頃から厳しいトレーニングを積み重ね、各国の世界大会を転戦する等、企業に所属しているとはいえ、その企業の業務内容からは完璧にかけ離れた日常生活を余儀無くされている。更に女性の選手に至っては、目指すべき結果に対して求められる筋力を得る為に”女”である事を捨て去らねばならない程でもある。アトランタ五輪後、かなりの番組で有森を見かけたが、当の本人は「もう何年もTVは見た事ありません。」という程、選考に惜しくも漏れた選手も含めて、オリンピック候補選手というのは、我々が当たり前と思っている”日常”ですら犠牲にして一瞬の戦いの為に、人生で最も輝いている季節を捧げている。

それが自らの判断と、持つて生まれた才能があるが故にの事である事には、勿論異論は無い。有森の様に注目を集めている選手はまだいいが、そうでない”一般の”オリンピック選手の引退後に待ち構えているのは、同世代に比べてはるかに遅れをとった社会人としての生産能力である。過去の日本人金メダリストの中にさえ、企業には「席を置いていただけ」だった為に、クレジット・カードすら作れなかったというヒトもいるのだ。

バルセロナ出場で、松野明美に同情するが為に生まれた世間からの中傷、を見事「結果」を出す事ではね返し、再度アトランタの舞台で世界の桧舞台に立った彼女に「走る広告塔」としての価値を見出してくれる企業が非常に多い。そしてそれは彼女が自らの努力で得た人生の大きなチャンスなのだから、そのチャンスを最大限に活用する権利が彼女には十分にある。JOCに個人の肖像権を一括管理する権利がどうしてあるのだろうか？

20年以上も前の事だが、やすし、きよしの「プロボーズ大作戦」という番組で、女性があいたがつっていた男性を「愛のキューピット」の桂きん枝が捜し当てたにも関わらず、彼女が番組の中で彼氏と再開を果たす事が出来なかった事があった（よくこんなに古い事覚えていたな）。彼氏が駅伝の選手だった為、個人の意志でTVに出場する事が許されなかった為である。（但し、当時のその規則は日本陸連のものであってJOCではなかったと記憶しているが）

JOCの今回の態度は、この20年前の姿勢と全く変わっていない。これだ変らないと、かえって関心してしまうのではないか。

カートレースの事故に思う。

この4月、私が6年振りにカートのレースに復帰する事をきっかけに、現時点でさえ、もう僕の半生に渡る付き合いになったゴーカートの世界を少しでも皆さんにお伝えしようと思つて、16歳以来に付き合いである「TEAMぶるーと」のHPをコーナーとして新設した矢先に、公式レース中としては遂に、日本で初めての死亡事故が、福井で起きてしまった。その方は26歳の女性で、2歳になったばかりの子供を残しての事故死である。

たまたまHP更新の「取材」を兼ねてSHOPにてくつろいでいた矢先に、現場に遠征していたチームのメカニックから連絡が入り、あらゆるメディアよりも真つ先に事の起こりを知る事になった。僕自身も長いレース活動の中で、接触して宙を舞う事は何度か経験もしたが、「怪我」といえる程のものはした経験は未だに無い。

元々「スピード」ではなく「スピード感」がウリのカートは、勿論全日本レベルでは即フオーミュラへと転身しても通用する位ハイ・レベルのドライブ技術とセットアップ能力が求められる反面、この女性の様な「主婦」が、日曜日にだけはサーキットに現れて、レーサー気取りを、それも「楽しく」演じられるのも又カートの世界だと思ってきたし、事実今までそうであった。

訃報を聞いて、僕ら店に居た者までが暗い気持ちに包まれた中、更に僕が気にしたのは、翌日の新聞に掲載されるだろう報道の具合だった。

僕がカートを始めた70年代後半は、まだまだモータースポーツ全体が、省エネや暴走問題に直結するかの様に、何かにつけて「目の敵」にされていた時代だった。80年代前半ですら、当時F1ドライバ―として最有力候補と期待されていた高橋徹選手が富士で事故死した時も、翌日の地元紙の紙面には「スピードの出し過ぎが原因と見られる」などと堂々と書かれていた。少年時代の僕はレースに行く朝、決まって母親に「スピード出し過ぎたらいかんよ」と言われて見送られた物だったが、かなりこれに近いレベルの視点である。

心がこもって無いだけに、余計に胸が痛かった。

その後中嶋 悟のF1デビューにより、ブームとしてF1が日本社会に認知され、喫茶店で普通のOLの会話の中からも「セナ」とか「プロスト」とかいう名詞が登場する様になった。だが、この好景氣と共に続いたF1人気も、「事故」というものが余り目立つたものが無かった為に、一見日本の社会の中で、モータースポーツもようやく認められる時代になったか、とさえ思えた。

が、やはりそうでは無かった。94年のセナの事故死は、今更ながら「レースでヒトが死ぬ事もあるんだよ」という事を改めて教えられた。ロニー・ピーターソンやジル・ビルヌーブで育った我々の世代には、悲しいながらも容認せねばならない事として迎え入れられたが、ブームに乗ってからの世代には、やはり受け入れ難い事実だったと見える。以後視聴率の低下と共に、次々とジャパン・マネーがF1から撤退し、未だにかつての勢いを取り戻すには至っていない。

幸か不幸か、翌日にはスポーツ誌の片隅に、事実だけが載せられただけであつた。特別ショッキングな事件として取り扱われた訳でも無ければ、改めて僕を怒らせる心無い語句も又、見当たらなかった。

ただ、これから先暫くは、なんとか家族をなだめてサーキットに向向いていたカーター達が、更に強い反発を退けながら、サーキットへと来なければいけない事だろう。

しいて僕が言える事とすれば、事故というのは我々の身近に常に隠れている。”まさか”と誰もが思う交通事故でも、毎年千人もの人々が亡くなっているし、一見楽しいレジャーも、油断一つでとても無い悪夢を見る事にもなる。

クルマという、ヒトの力を何十倍にも大きくする事を誰もが知っている道具を使うスポーツだけに、風当たりも強い。スポーツとして認めない人も、まだ多い。

けど、僕はそれでも尚、”スポーツ”としてのゴーカートを、愛していきたい。コンマ秒ラップを縮める事に喜びを感じたい、自分より速い相手がいて、その相手に負けまいと意欲を燃やす自分を好きでいたい。

そして、勝てた時の自分を誉めてやりたい。世代や環境を超えた多くの仲間がいる事を誇りに思いたい。

多田美希さんのご冥福を、心よりお祈りします。

(97年4月23日)

「失樂園」に想う

朝のTV番組の中で紹介されて、この映画が某経済誌の連載小説に端を発してブームになり、上映された映画もかなりの人気を呼んでいるという事を初めて知った。残念ながら、この話題そのものを知ったのは今日が始めて。その新聞を読んでいないから存在すら知らなかったし、内容の聞きかじりする限りではそれ以上を、時間を割いて知ろうという気にもなれない。

「援助交際」をようやくにして「いけない事だよ」と指導する動きが僅かながらもある中、女子高生のイメージが、少々はマスコミに煽られた所がありながらも恐ろしく飛躍していった中で、いけない恋とはいえ、たった一人を熱く愛して、心中するまでに至る程燃える「純情」さが逆に共感を呼んでいるのかも知れない。

僕は、「誰からも祝福され、ハッピーに包まれてゴール・インに至るラブ・ストーリーに熱愛など存在しない」と思う一人である。周囲の反対が大きい程互いの絆は深まり、後ろめたい恋程出会いの一時は輝く。肯定してはいけないんだろが、何の駆け引きも打算も存在せず、ただひたすら相手のみを求める恋など、最早不倫の中にしか存在しないのでは？とすら思っている。

群れている事に安心している間は、絶対にそれに気付く事は無い。孤独と引き換えにしてこそ、自分にとっての大切なものが見えて来る。

僕は女性と電話するのが苦手な方である。「ゆうべ何してた？」とつい、当たり前覚めた質問をしてしまいそうだからだ。仮にこれが人妻であつたりしたらどうだろう？

「亭主と寝てた・・・」という当たり前の答えが出てくるのもう見えて来る。だから当然「他にも誰かいるんだろ？」という猜疑心はハナから存在しない。それを承知でも尚「声が聞きたい」方へと気持ちが傾く。

「会えない時間が愛育てるのさ」の歌誌のごとく、限られた時間がより一層人を熱い想いへと駆り立て、互いを氣遣う純粹な気持ちでいられる。

もう一つ言えば、例え壊れても元々という気持ちがある一つ存在しているだろうからお世辞も隠す事もないピュアな気持ちでもいられると思う。お金のかかるプレゼントも要らない。例えその目的がSEXであるにせよ。求めるのはお互いという純粹なものであると言える。

組織化され、「個性」を必要としない風潮の社会の中。誰もが自身がこの世に生まれた「価値」を求めたがつている。それを「愛する事」の中に見つけられたならば最高なのだろうが、それを維持して行く事は極めて難しい。パソコンの中からはいつでもデジタル化され

た情報を入手出来る様になったが、目と目が合った時のインスピレーションや、肌のぬくもりまでは与えてくれない。

誰もがこの世で一番好きな人と一緒になれるわけでは無い。誰だって心の中に傷の一つや二つは持っているだろう。ならば、「だからこそ」分かる事もあるはず。

修復が困難になる前に、まず「貴方」が、心の中で暖め続けた最高の輝きを、飛び切りの笑顔と少しばかり洒落た演出で届ける術を身につける事が必要なのではと思う。(演出のし過ぎは誤解を招くかも)

これは何も独身の人に限った事では無い。飛び切り輝いた出会いや時めきは、何時、何処で貴方を待っているか分からないのだから。

(97年5月11日)

「元現場当事者として」・佐川、ヤマト荷主奪い合い

(9月5日。中日新聞より)

「宅配便トップのヤマト運輸と大手の佐川急便による荷物争奪戦が過熱し、昨年からは各地の集配員の間で悪質な嫌がらせや暴力行為が横行。福岡で今年5月、ヤマトの集配員が佐川の集配員に顔を殴られ、2ヶ月の大怪我をしていた事が4日分かった。(中略)ヤマトが集荷時間の延長など営業強化に乗り出し、佐川の顧客を奪う形になった事が背景にあると見られる。」

この際白状するが、僕は昨年まで11年間、この「大手」の側で働いて来た。その過酷な仕事振りは評判通りで、お陰で、現在勤めている中堅の運送会社の仕事が未だに退屈で叶わないとさえ思う程である。

あらかじめお断りしておくが、こうした事件があつたからと言って、11年に渡りお世話になつた会社を非難するつもりは毛頭無い。在職中に得られた収入は勿論の事、多くの上司や先輩方から学んだ事は立派に僕の掛け替えの無い「財産」となつたし、現にHP開設に至つたこのパソコンも、当時の収入で買った物である。

外でこの会社のOBだつた事を話すと決まって聞かれるのが「何故あんな風にいつも走り回っているのか?」「歩くと罰金つて本当?」「1日トータルの集配ノ集金ノ営業の仕事が完璧にこなせられるのなら、歩いてたつて構わない。だか、歩いて仕事しててそれが出来る人間など、ベテランの中にだつて一人もないというのが正直な所である営業のノルマとは、自分が与えられた集配エリアの運賃収入を前年同月より一割上げる事。エリアごとの前年成績は更に顧客別の売り上げノ単価ノ発送個数までもが掲載されてプリントされ、売り上げ目的達成に際してどの様に取り組むかを上司と相談の上で決める。他のコースに比べて顧客件数の少ない所ならば新規開拓を狙う。発送単価の低い所ならばどうやってそれを引き上げるか?等等・思い出だけで本が一冊書けてしまう。他の営業職と異なるのは、何と言つても「前年を上回る数字を、只でさえ過酷な業務の中で出さなければならぬ」事であらう。

しかしバブル崩壊以降から、これらありとあらゆる手段が有効ではなくなった。大手の移転でもない限り新規顧客は望むべくも無く、単価の引き上げなどこの価格破壊の世の中で出来る訳が無い。他業者だつて必死である。

「王手」の会社の朝の朝礼は「軍隊」そのものだった。とにかくNOが言えなかった。

「お前らもつと給料が欲しいだらう!?!」

「はい」という返事が元気が無いと「本当に欲しいと思つてゐるのか!?!」という具合である。

精神的にも肉体的にも過酷で、ムダ話してるヒマも殆どなかった代わりに、少なくとも

僕の周りでの人間関係は至って良好ではあった。過酷に業務を少しでも皆で早く終わらせようと、繁忙期には必ず手分けして配達や集荷を分担したりもしたし、ベテランだから楽が出来るという風潮ではない代わりに、周りの誰もが自分と同様の過酷な仕事をしているという事が分かっていったから、相手を疑うという事も余りなかった。

それでも11年という長い勤務の後には、自らの矛盾に終止符をうつづ為に退職を決意した。退職に際しては「自分がいたグループの有給が消化出来る様、後任が決まり次第」と希望してはいたが、自分に既に業務に対してヤル気が無くなっているのを見抜いた担当課長はそれを許さず、2週間後に僕は退職となった。

自分の退職後、わずか4ヶ月の間に同じグループとして仕事をしていた直上の上司と、すぐ隣の地域を集配していた後輩が相次いで体を壊して入院した。

どうしても加えなければならぬのは、僕の場合、世間一般にイメージされた業務とは少し異なり、殺人的ですらある社内の業務の流れがら開放された自分の集配地域での仕事においては、比較的のんびりとした地域を任されていた事だったろう。何せ会社からでも時間以上国道をひた走ってたどり着く程遠い街へと向かう合間に、僕はハンドル握りながら唄の練習をしていたのだから。

先日、一年ぶりに自分が仕事をしていた街を訪れて見た。顔を出したかつてのお客さんの誰もが、以前と変わらぬ笑顔で出迎えてくれた。自分の周りにやたら胃を悪くした人間が多いので、地元で有名な薬草を手に入れる為だったのだが、あいにく端境期で、もう2ヶ月は待たねばならないそうだったが、当時毎日出入りしていたお店の奥さん曰く「一ヶ月位したらまたおいでよ。沢山とつといてあげるから」

断つておくがこの薬草、ある程度高い所しか育たない「高山植物」であり、当たり前ながら一本一本手で摘み取るシロモノである。「あんなもの買うもんじゃないよ」と生息してそうな場所を教えてくれたヒトまでいたが、都会育ちの僕には見ても区別がつかないだろう。

空気の美味さは勿論の事、水の美味さも改めて実感した。峠を流れる湧き水を汲み取って、名古屋の知人宅に持ち帰り、市販のミネラル水と味比べしてもらったが、文句無しで湧き水に軍配が上がった。

「水の綺麗な女性の肌は美しい」過去何度となくあった養子縁組みの話をことごとく断った事をちよつとだけ後悔した。コンクリートで仕切られた部屋に一人で住む様になって一年。涼を感じるそよ風すら人工で作らねばならない

今の生活の中、仕事を通じて得られた「第2の故郷」の有難さを、只実感するばかり。在職当時はいつも集配の仕事を通じて多くの人達と笑顔を交わせる事が何よりも楽しかった。「1日の仕事をもつ四時間位短い時間で終わってくれて、ノルマももつ少し楽なら、給料は今の半分でもいいのに」と真剣に思った。だがそんな平和な職場環境など、あの企業には存在しない。またそれが許される社風ではない。

空気のうまさも水の良さも、仕事として訪れていた頃はじっくり味わう暇など全く無かった、ひたすら数字に追われていたというのが正直な所である。新聞で問題になった暴力的な事件も、当時の僕でさえ手こそは出さなかったものの、一歩手前までならいくらでもあった。

帰路につく途中で、仕事中の後輩に出会った。

「数年前の債務保証の問題だったら『トップがやった事だから、俺らはキチンと仕事していれば何も恥じる事は無いだろう』って思っていたけど、今度は現場レベルの話だからねえ・・・」

在職中の自己管理だけでも相当大変なのに、「辞めてからの人生をどう生き抜くか」がもっと大切な事である事には今も、そしてこれからもずっと変わる事は無い。

一つだけ確かな事は、今も現役で頑張っている仲間達が、この書き込みを見られる事、その他通信の世界に溢れる情報を自らの判断で選択し手に入れられる事は、絶対にないという事だろう。僕はこの世界で自己表現する時間が何よりも欲しかった為に、あの会社を去ったのだから。

(97年9月5日)

「所詮ブームで終わるのか？」パソコン市場の後退

今年4月～6月の、秋葉原のパソコン販売台数が前年を21%程下回ったそうだ。需要が一巡した事、WIN95の様な需要を喚起するキーワードが無い事、値段が高い事、ユーザーが使いこなしていない事などがおもな原因らしいのだが、まあ分からないでも無い。S O H Oを密かに目論む僕にとつても、パソコンは現在と同程度以上の環境を有する物がもう1台ぜひ欲しい所なのだが、様々な要素が絡んで購入を思い留らせている。WIN3.1を動かすのならば十分な性能だった486SXのThinkPad230が95を入れた途端に重くなってしまったし、周辺機器のドライバ関連が安定した動作をしてくれたのは更に半年を要してからの事だった。現在愛用しているPentium 搭載の56kのお陰でホームページに音を貼り付ける所までは出来たが、これとて年末発売予定のWIN98を動かすにはスペック不足と来ている。機能が多過ぎても使えなければ意味が無い。WORDや一太郎という重量級のワープロソフトを使えば様々な書式の書類が作成出来るが、ある程度の書式ならば未だに僕が愛用している初心者向け総合ソフト「WORKS」の中にある程度は詰まっている。先日もかつての会社の後輩が自宅へ訪ねて来て、「WORDの使い方がまだよく分からないんですけど・・・」と来たので、WORKSに入ってる様々な書式をプリントして見せたら、「これは楽ですよねえ」と感心して帰って行った。最新型や高性能のソフト/ハードが必ずしも便利という訳では無い。個人の要望と能力が判断して、それから少しずつグレードアップしていったって遅くはない。使えない高価なソフトを買って途方に暮れて使用を諦める方が損だと思う。

経験上もうThinkPad230にWIN95を入れた時の様な苦労はしたくないから、僕ならば98発売から更に半年後、ドライバや対応ソフトが安定し始めた頃に発売されるプリインストール機を買う。だからと言ってそまでの間、我慢を強いられる訳でも無い。あれば便利な機能もあるだろうが、あくまで安定した動作の中で使っていきたい。

「値段の高さ」だが、数回アキバを訪れた程度の僕でも「アキバなら何でも安いわけではない」という事がやっと分かった所。場所によってはハッキリ「これ高いぞ!」と言いたい所すらある。「高いぞ!」という基準は、インターネットの商品検索ページで調べた価格情報である。それすら見られない地方都市の人が「アキバ神話」を信じて買いに来るのだから、とりあえず無い事には何も始められないのだから、「度目は授業料と割り切つて、次からは大枚はたいて買ったマシンでしっかり情報収集に努めて頂きたい。

「就職するのにパソコン使えないといけないんですか?」なるコピーに刺激されて危機感に迫られて買ってしまったヒトも多いはずだが、多くの人にとって不幸なのが「教えてく

れるヒトがない」事だろう。

現在僕は仕事で出入りしている従業員80名程の会社の中の2名程に、の会社のHPを作成すべき指導をしている。

だが、その反面で、今の僕にはどうにもならない「現実」に目を向けねばならない場面にも遭遇してしまった。経理担当の若い女子社員が、仕事を終えた後に一人でパソコンに向かい、マニュアルとにらめっこを続けていた。「Excel」をマスターする為である。しかし残念な事に、つい最近になってパソコンを本格的ねに導入し始めたこの会社には、一人前に使いこなすのに2年かかると言われるこのExcelを完璧に使いこなせる人がいない。僕のHP開設への足がかりは某社の「HP開設講座」が基本だが、これを受講した当日は隣の教室で表計算ソフトの講習が行われていて、一見元氣そうな若い男性二人が、激しい口調で講習を進める、彼らと同一年位の女性講師の前で小さくなっていたのを今でもよく覚えている。逆に言うと「完璧に使える」「イコール」「それで食べていける」「位にスゴい事なのだ。

「マニュアルを読めば何とかなるだろう」とでも上司は思っているのだろうが、ここまです多機能な実用ソフトになるとそう簡単には行かないだろう。

景氣回復への足がかりの全てをパソコン市場に依存したツケが、身近な所で徐々に回って来ている気がする。

(97年9月20日)

「チャイドル」のママ達に一言

タレント事務所のオーディションに子供の応募が殺到しているそうである。どちらかと言うと「本人の意思」よりも母親が半ば無理矢理連れて行くケースの方が多いそうで、「子供の社会勉強」というよりも「母親の道楽」化している場合の方が多いとか。限られた仕事の枠を確保したいが為に学校を欠席させてまで「タレント業」へと追いやろうとする現在の風潮が最近地元紙でも報じられ、社会問題にすらなろうとしている。

恥ずかしながら子供達の母親世代で圧倒的に多いのが、僕と同じ世代だそうだ。

かく言う僕自身も20代前半に某所にて数年、「タレント研修生」として、役者を目指して踊りや発声の練習に精を出していた時期がある。まだまがアイドルが遠い夢の存在だった「古き良き時代」？を思い返せば、100人程度が入れ替わりしていた研修生は約7割が女の子だった。あれから10数年を経て夢敗れた当時の彼女達が、自分の子供達に新たな夢を託して走り回っているという構図である。

更にその少し前はゴーカートに乗ってレースをしていたのだが、「誰でも乗りに乗れる訳ではない」の言葉はズバリそのまんこの業界でも言えるだろう。でも仮に、何かのCMに採用されて有名になったとしても、当人達のこれから先の長い人生にとってどれだけプラスになるのか？という事をぜひお母さん達に考えて欲しい。

子役で有名になった人のその後の人生は、どちらかと言うと「不幸」になるケースが多いそうである。「人生のピーク」を子供の頃に既に迎えてしまうからだそうだ。人の人生にとって最大の醍醐味？は自分自身が自らの意思で夢を描き、努力を重ねた果てに、自身が最も輝いている場面でその絶頂を迎えられる事ではないだろうか？この場合「結果」は大して大事ではない。本人の自己満足、たけに終わってもいいと思う。問題は「本当に全力を出し切ったか」である。

現在はお笑い？タレントと仮した森末慎二も、一昔前は立派な体操金メダリストであった。鉄棒競技で10点満点を出して劇的な逆転の金メダルを獲得したその瞬間「自分の人生の運はこれで全て使い果たした」と思ったそう。自身の人生においてその頂点に達していると感じる事、出来る事。これの方が金メダルを獲得する事同様、もしくはそれ以上に大切な事ではないかと思う。

先日もあるTV番組で、我々の世代から圧倒的指示を受けていた某TV番組シリーズの子役が、以後の人生を正に「転がり落ちる」様に転落の一途を辿り、長く暗い絶望の時を経てやっと一つの幸せを掴むに至った経過が紹介された。「苦勞していない人よ苦勞している人の方がいいと思ったから」が奥さんの弁。幼年期にチャホヤされる事に慣れてしまった後で、誰かにそう言わせるまで、母親達は子供達の人生を考えているのだろうか？

プロのスポーツ選手目指して毎日練習に励むもいい。結婚式のウェディング・ドレスに憧れるでもいい。

お母さん達へ。子供の人生で一番輝いている時期は、ぜひ本人に決めさせてあげま

せんか？

(97年10月25日)

「僕も考えたい『ポピュラー音楽の世紀末』」

〜藤村俊之、中日新聞12月16日夕刊より〜

(内容より)CDが誕生して既に10年以上が過ぎた。何度再生しても盤面が擦り減らないCDは夢のメディアのはずだった。が、皮肉な事に中身である音楽の寿命がどんどん短くなりつつある様で、製作側も初めからすぐに飽きられる事を意識している様でもある。

僕もズバリその通りだと思う。

僕の半生の中で何より良かったと思っているのは、最も多感な10代後半に日本の音楽が劇的とも言える充実ぶりを図った事だろうと思う。と言つと「ビートルズ」やGSソング、果ては「美空ひばり」まで、人それぞれ人生を支えてくれた音楽があると言つかも知れない。確かにそうだが、「選択する余地が様々」であり、且つ音楽的内容的にも最も充実していた時代といえ、この70年代後半〜80年代が最高だったと思っている。

因みに僕のパソコンはノート型ばかりで、これでMIDIをやろうと思つたらマルチポートMIDIインターフェイスが無いと最近流行の32ポートplayを実行出来ない。でも、それでもいいと思っている。音楽は元々「集まった人間の個性」の数だけの音が共鳴して一つのメッセージとなるべき物だと思うし、何よりもPlayerの「汗」を感じさせてくれる音楽の方が僕は好きだ。更に言えば、16パートも要らない。8パートでも十分だとさえ思っている。僕の音楽の起源が、「スペクトラム」という8人編成のプラスチック・グループだったからそのプレーヤーをシュミレートしたパートの数だけ音が出てくれればいい。僕が「打ち込み」をする時に何より気を付けるのは「実際にプレーヤーが演奏するのだったら本人が「楽しんで」音を出してくれるか」である。

わざわざそう言う利理由に、最近流行の音楽の、特に打楽器系の音というと、僕には余りにも単調過ぎてならないからである。更に言うとなんの手では速すぎて打ってこないリズムも多い。こんな音を出せと言われて、演奏家はライブで観客の前で「自分も楽しんでる」音を聴かせてくれるのだろうか？

元々僕がMIDIを始めたのも、決して若くなくなつてから音楽を始めたいと思つたものの、周りに誰も協力してくれそうな友人がなかったから「止むおえず」沢山の音を一度に出してくれる「機械」に頼らざるを得なかったから。音楽との触れ合いそのものがプラスチックバンドだったから元々大勢で演奏する方が好きな方である。でも残念ながら最近のヒット曲には、この「大勢」を感じさせてくれる音楽が非常に少ない。いや、「無い！」

音質劣化の無いCDの責任もあると思うが、全てではないと言いたい。確かにアナログ・レコードの時代は何度も聴いてると溝が擦り減って音が悪くなってくるから、針を落とす時には「心して」聴いたものだ（因みに、僕が今でも大事にしている「キャンデイズ1676DAYS」は買ってから18年になるというのに、未だに2回しか針を落としていない！）更に言うところの「キャンデイズ」の場合、最後のシングル「微笑み返し」は、最後という事もあってか相当気合いを入れてミキシングされたらしく（笑）音が少々こもっていた。でも、誰も文句を言わなかった。それどころか、最初で最後の「1位」となった。だから前記した「スペクトラム」の様に、「演奏して歌う」プレイヤーが、音と唄を同時に録音する「一発録音」なんてのはそれだけで十分なセールス・ポイントにもなり得た。音が格段にクリアに聞こえたからだ。CDが登場した当初でも、「良いものは良い」と言えた。ドラム系の音もストリングス系の音もちゃんと演奏家がやってくれた音をちゃんと入れてくれていたからだ。デビュー時にヘタクソな唄でボロカスに言われた「松本伊予」だったけど、CDでリリースされた「素敵なジェラシー」は僕自身のベスト10にも十分入る「名曲」だと思っている。

更に時は流れて・・・今はどうだろうか？最初から最後まで単調に同じパターンを繰り返すパーカッション。何度も歌わせて「良いとこ取り」をして繋ぎあわせたボーカル。「いいところ」ばかりならまだしも、SMA Pのある曲で、同じ所でメンバーの声がかすれてばかりいるのは手抜きじゃなくて一体何なんだ？音楽もその他の商品と同じだと思う。聞き手が厳しい耳で選択していけば、きっと良くなっていくと思う。

（97年12月16日）

「明暗を分けたのは分析力？」

「長野五輪の後で」

日本が沸に沸いた長野五輪。世界NO.1の実力と母思いが涙を誘った清水、ラージ・ヒルの金メダリスト舟木よりも完全にヒーローになってしまった「ハッピー」原田。TVの画面を見て、4年前の「恨み」等どこかに忘れて思わず涙してしまったのは、僕だけではない。

そのまま「感動」の涙で終わってくればいいのだが、時が経つに連れ様々な角度から「勝利への道」を検証しようとするメディアはそうも言わせてくれそうにない。

「科学はあくまでほんの一部分のサポートだと認識した方が？」(AERA)の言葉もまたあり、元々実力があつたのは言うまでもないが、現場での情報分析に神経を注ぎ、的確な判断を下した末での勝利だったという事も見逃せない。スタート審判の「クセ」に気付いたスケートの清水、スタート速度の速さに気付き「団体もこの程度でのスピードでの勝負になる」と判断したコーチ。(事実ワールド・カップでは助走路に塩を撒いてスピードを上げるといふ「いやがらせ」もあるとか

「走るコンピュータ」と称され、F1ドライバーの走りに「頭脳」をもたらしたとされるニキ・ラウダ。アクビをしただけで記事になった程の彼の「必勝パターン」には伝説となるのに事欠かない。マシンをより早く仕上げる開発能力に長けていたでなく、スタート前には必ず競技長に「社交辞令」として挨拶に伺う傍らで彼のスタート合図の際のクセを入手し、自分を激しく追い抜いていったマシンがあつてもそのマシンに不調があるのを見抜くと、慌てずペースを維持して相手のペースの落ちるのを待つて上位に上がる。瀕死の事故という経験を経た上で確率された安全、且つ「チャンピオンになる為の」走りは確かに見る側には面白く写らなかつたろうが、確実に「結果」をもたらした。マシンを降りた後の人生でも航空会社を経営する等、桁外れの成功を収めてるのも彼が随一である(77年にフェラーリでコンビを組み、現在は次期アルゼンチン大統領の座を狙うロイ・デマンも凄いが)

アマチュア・スポーツの祭典と五輪が言われてたのはもう昔の話。この世界にさえ激しい「情報戦争」が渦巻いてたのを思い知らされた大会であつた気がしてならない。一昨年の夏の甲子園決勝で「風」を読み、見事一死満塁のピンチを脱して優勝を飾った松山商業もかりである。

純粹に「努力すれば必ず実る」だけでは済まない時代が、もう既に始まっている。次回の冬季五輪で荻原は32歳、原田は33歳。体力的に訪れるピークを前に、それを補つて有り余る「技」をどんな形で身に付けてくれるのか、今後に注目したい。

(1988年2月25日)

「もう100万円安くするか名前を変えて」→新カブトムシ誕生」

永きに渡り「かぶと虫」の愛称で親しまれ、今なおファンの多いフォルクス・ワーゲン社のビートルが、「ニュー・ビートル」の名前で新型となってデビューし、国内でも今秋から正規販売される事になった。

「ビートル」というのは「愛称」であってその車の正式名ではない。初代の誕生が1938年という事からもお察しが付くが、あのヒトラーが命令して作らせた「国民車」である。恐らく彼が命令した事で唯一の「良い事」じゃないか？という事はさておいても気になったのがその「車格の位置付け」従来モデルの1600ccというエンジンは2000ccと拡大され、価格は辛うじて300万円を切るという設定。この価格帯だと国産ならば「高級車」のクラスが手に入るし、輸入車でも今日びはそこそこゆったりと乗れる大きさが手に入る。

元々初代ビートルのコンセプトは「(当時の)一般のドイツ家庭の家族4人が無理無く座れて、十分手の届く価格」だったはず。室内が少々安っぽかるうがまず「皆で乗って楽しい、且つ安い車」である。それが今度は中型サルーンと銘打って出てきてしまったものだから、独車ファンでなくても驚いてしまう。輸入車でも「ベーシック・カー」と呼ばれるクラスの車は今なら150万円程度から買える。何故「ビートル」の名を使った車をこの世に送り出す時に、それらと競合出来るパッケージングにできなかったのだろうか。仏車に10年近く乗り続けて来て、そのあたりに常に感心して来た者にとって、何故か今回はその当たり々名前と車格に猛烈なミスマッチを感じざるを得ない。「希少価値が高いから十分売れる」と輸入元は豪語してるが、今の世の中ジーンズやスニーカーならともかく、新車を「希少価値」で判断して買う余裕のある人がどれだけいるだろうか。物の価値は人に押しつけられるものではなく、自分自身で生み出す物である。只、クルマそのものは新聞の写真を見る限りでは広くとられたフロント・スクリーンが従来のドイツ車らしくなく、開放的な室内空間を想像させて個人的には好ましく思う。

これでシトロエンのハイドロが付いてくれたら文句無しに「買い」なんだけど・・・無理か。

(1988年3月31日)

「残念ながら更に増える紙の消費」

ビック・バンとは何？とか云々考えている内に時は4月1日を迎えた。個人でも自由にドルで買い物が出来たり、外貨で貯金が出来る様になったとか云々伝えられるが、いくらドル預金の方が日本円でする場合より利息がいいと言っても、一市民には未知数なりスクも様々。要は「人より沢山儲けたかったら、人より沢山勉強しなきゃいけませんよ」これだけは確からしい。かって猫も杓子も株に飛びついた頃の様に、皆やってるからとばかりにうかつに動くと、大きなしつべ返しを食う事は確かな様である。いずれにしても、自己を守る為にも、これから先更に「紙」を使わねばならないかと思うと、胸が痛い思いがする。

パソコンの普及が紙の消費を抑える。と言われていたのは今はもう昔。使いこなすのに必要な膨大なマニュアルや、使ったら使ったで個人のレベルでも印刷して保存しなければならぬ資料や書類作成の為に、全体の生産は相変わらず増加の一途を辿る。僕でさえ50ページはあるパソコン雑誌の中で例えば「ページでも自分にとって有用な情報があれば買ってしまう有り様。(月に2冊以上パソコン雑誌を買っていたら、立派な「をたく」の仲間入りらしい)近所の子供会が定期的に廃品回収を実施してくれているので、古新聞から古雑誌まで、とにかく「紙」は全て残して束ねて出す様にしているが、とにかくその量が独り暮らしの割に半端じゃなくて我ながら驚いている。前回の回収からそろそろ2ヶ月が経とうかという今、ビニールの紐で縛られたその高さは優に1mに達してしまった。

ただ毎度の事ながら気になるのは、この廃品回収の際にこうして雑誌や新聞を束ねて出すのが30人は住んでいるアパートでは僕一人だという事。あとの住民は皆1階に設置してあるダストBOXにそのままポイしているという現状である。

インターネットという、「紙を使わない」情報メディアに魅せられ、当時の多忙な物流職を辞めてまでしてHP開設の為に勉強したが、現状では僕個人の紙消費を爆発的に増加させてしまっている事実も暴露してしまった。(勿論、それと引き換えに得られた情報や人の輪も価値ある物ではあるが)こうなると、最早紙を大量に放出する媒体を悪と決め付ける訳には行かなくなってしまう。「本が多過ぎる」と言われるこの頃だが、要らないと判断された情報は自然と淘汰されて消えていく運命にある。時代に先駆けて紙媒体から撤退してネット配信に切り替わった雑誌もあるが、まだまだ少数派。何だかんだ言いながらも購買している雑誌の中から、保存しておきたい記事を項目別にスクラップしたり大事な所に線を引いたりという作業は、やはりパソコンのHDDの中でやるよりも手に紙を持ってやった方が未だ効率的に思えてしまう。

インターネットはまだまだ発展途上の分野。紙で配達される新聞がネット配信へと変

わるには、通信環境の更なる高速化と消費する側のコストダウンに向けての（電話代＋課金）が現在の代金と同等か、下回る事（技術開発が要求されるだろうし、それはまだまだ時間がかかる。ならばせめてそれまでの間、次の世代の為に残してやれる物は極力残してあげられる工夫が、今の個々に求められるのではないか。

（98年4月2日）

ついにでた「シースルー浴衣」

昨年夏の「ホルターネック」冬の「スリット・スカート」と、相次いで露出増した女性のファッションが流行している。さぞや今年の夏、業界はどんなスタイルが登場してくれるかと半分期待していたら・・・やっぱり出てくれました。今年の夏勢いをつけそうなのが、何と「シースルー浴衣」メーカーも「学割」をするとかで、今年の夏いやでも流行しそうな気配が散り行く桜の中に感じる・・・わけないか。

多様化し過ぎた価値観の中、自己を表現する手段に悩む世代は相次いで、体を露出する事で自己を表現する事へと走っている。一昔前ならば、日本人女性の最も美しいとされていた「恥」の部分が、あつという間に崩れてしまった世の中である。

「恥」は、それを恥かしいと本人が知りつつ、さらけ出す事に本質があると僕は思う。人間誰もが「矛盾」を抱えている様に、僕にも常に「恥を知る心」と「恥知らず」が同居する。開放的な気持ちを持つのと裏腹にコンプレックスも抱えている。でもだからこそ僕も「人間」として生きていける様な気がする。

故・本田宗一郎が生前の著書の中、アメリカに向いた時の談話で

「なんせあつちはみんなデカいだろう？ 気後れしちゃういけないと思って早速女を買ったんだ。そしたらいきなりスッポンボンになって「カモン！」ときが来た。やっぱりああいうもんは見えそうで見えないのが一番いいなあ」

個人的に賛成なのは別として、本田技研も創業時、初のオリジナル・バイクを製作した際に、車体のフレームに女性の体の丸みをイメージした曲線を描いたという話も残っている位だから、今この世に、氏が元気でおられたなら、ひょっとしたらシースルーの自動車なんてのも作ったかな？

かも知れない。工場見学に訪れた松下幸之助に、本人とは知らずに「あの赤いシャツを来たオジサンは元気がいいねえ」と言わせた等、豪放さばかりがクローズアップされていた氏の事。でも知る人ぞ知るのは、合わせて持っていた非常に細やかで暖かな性格の持ち主。単に見せるだけでなく、彼独特の「遊び心」を織り込んだクルマを出していたかも知れない。大胆なだけでは、人も、作る物も他人には受け入れられないという御手本なのだろう。

自動車の歴史の中でみもう一つの偉大なカリスマ。E・フェラーリは工場を訪れた名女優を「貴方の細腕では当社のクルマは扱えません」と簡単に追い返したという。「どうせ熊になるなら一番獰猛な大熊になれ」を信条としたフェラーリではあったが、彼もまた「私は自分の母親を殺したようなものだ」(自チームを引っさげて、かつて所属していたアルファ・ロメオを打倒した時の言葉)という情け深い一面を時折覗かせた事もしばしば。多く

はカリスマであるが故にベールに包まれてはいても、かつて彼の元で働いた人からは、彼の人間的な温かさを語る物が多い。

「フェラーリ」と「ホンダ」今でもこの二つは自動車レースの最高峰F-1の世界でも強烈な個性を放っている。

「陽と陰」的な正反対の個性を放つ両者の様に思えるが、一つだけ共通した事がある。亡くなる際に「恥かしいから絶対に葬式を挙げてくれるな」なる内容の遺言を残した事。大胆な反面で常に、そして最後まで心配りを絶やさなかった、両氏らしい幕の引き方だと思ふ。

一人の男として露出の高いファッションは大いに賛成。でも同時に彼女達の日常生活で、常時留守電をONにして相手を確認してから掛け直したり、夜一人で歩く時は相手がいないくても携帯を片手に「話しているフリ」をして歩く等、「自己防衛」の手段がより多彩且つ複雑になっている昨今。開放感どころかよりせっぱ詰まった「危機感」を与えてくれるのが、ネット産業といいファッションといい近頃の流行と言ったら言い過ぎか？

技術もファッションも、より生活を楽しみ、又は豊かに「演出」させてこそ価値のある物。せめて「綺麗だ」と素直に感じて送る視線に「スケベオヤジ！」とだけしか帰って来ない様な冷たい流行は流行って欲しくない。

(98年4月10日)

早く全国展開を、地域限定割引サービス

僕もNIFTYのフォーラムのスタッフを担当している手前、通信は未だインターネットよりもパソコン通信の方が多く使用します。

この所頻繁に変更されるNIFTYのAP変更に伴って、僕も新たに割引サービスを受ける回線の選択とか、その他のサービスとの比較をよくしますが、(暇なやつ)その中でちょっと「これはあ？」と思った事なんぞを。

(早寝早起きの生活パターンが定着して)現状主役の座を降りたとはいえ、まだまだテレホーダイの時間帯は貴重。とはいえ午後1時以降のインターネット回線は混雑してる所が多いから、(という勝手な認識)もっと早い時間に利用する機会が増えて来ると、後で請求書におったまげるといふ悪循環自己責任だろ)が、(NTTで提供されている様々なサービス(テレチョイス・テレワイズetc...)を比較・シュミレーションして検討してみても、まだ現状が安く収まっている・・・と思った矢先に、どう試算しても20%は安く済ませられそうな気配を見せたのが「タイムプラス」

これは月に200円払う事によって、平日平常時間の料金を3分10円から5分10円に、午後11時～午前8時では4分10円を7分10円にするという物。過去1年間の電話代の請求書を手本に試算してみたら、最高で25%、最もテレホーダイ時間の使用が多かった月でさえ20%のダウンが確認出来ました。(因みに独り暮らしなので、使用は全て本人ですから、その辺は楽ですね)試算

* 因みに「テレホーダイ」なら「日当たり24分以上利用すれば元がとれますが、「タイムプラス」ではほぼ同じ料金で35分位まで利用可能です。「位」なのは200円の使料金の為

こんなセコイ話でよかったです・・・皆さんのご意見を

(98年5月13日)

すぐに覚めそう「ワールドカップ」

元々それ程サッカーが好きではないんだけど、それでもこれだけマスコミに煽られたり、ましてや「チケツトが無い！」であれだけ大騒ぎされては、いやが上にも日本戦位は観戦しようという気にさせられてしまう。

「ワールドカップ」自体は世界で最もスポーツ人口の多い競技の大会で、且つ歴史的な競技でもあるという事は十二分に理解出来たのだが、かつてのF1同様、ルールも大して知らない人さえもこぞって熱狂するという状態には相変わらず「？」を冒頭に付けざるを得ない。サッカーは野球に比べると遥かにルールが少ないらしくて、その分かりやすさこそが世界で愛される理由なのだと思うが、それでも最低限「国を代表するプロ」が戦う以上、それなりのスーパースター・プレイヤーが見たい。

14日夜のアルゼンチン戦。素人目に見ても「何故見方のいない所へボールを蹴るのか？」という光景が非常に目についた。ブラジルの一流選手のようにドリブルで相手を何人もゴボウ抜きにしてくれる光景なんて今の日本選手には期待していない。でもそれならそれで、日本国民が世界に誇る（笑）「組織力」「チームプレイでパスをどんどん繋いでチャンスを作る位の事はして欲しい気がする。最終予選の時も「パスが繋がらない」「事にジレンマを感じる光景は少なくなかった。これは力ズがいようがいまいが関係の無い問題だと思う。

そして、一度も競技場にまで出向いてサッカーを観戦した事の無い人間でさえそう思っているのに、わざわざ会社を辞めてまでしてフランスに観戦に行った人達は一体日本のサッカーのどこに酔いしれているのだらう？と。僕らの小学生時代は野球が相撲位しか身近な競技は無かったが、それでもここ一番の時にしつかり打ってくれた長嶋がいて、ホームランを量産してくれた王がいて、あのちいさな体で巨漢とも言えた北ノ海と真正面から勝負して押し出して勝利した初代・貴乃花がいた。

「ここ一番という大事な場面でファンの期待を裏切らない」本当のスーパースターの存在を、僕は日本のサッカー界で知らない。

お隣の強敵韓国でさえも未だ一勝も出来ないワールドカップ。例え勝でも出来れば日本にとっては「金星」といえよう。でもマスコミにはお願いだから、帰国する際にもう飽き飽きして来た「感動を有り難う！」はやめて欲しい。

「感動」は自分で作る物である。

(1988年6月15日)

「プロだからこそ自分を捨てて」

0対1で破れた対アルゼンチン戦。「もしカズがいたら」云々の議論は、その筋の評論家様に任せればいいとして、今の僕に「意外な」とも言える 角度からで語ってくれたのが、中日新聞でコラムを連載しているソウル五輪 シンクロ銅メダルの小谷実可子さん。

「自分の為でなく日本の為に全てを賭けてくれる人としてカズを必要とした」のコメントを聞いた時に既に「カズはW杯は出ないな」と察知したというから かなり鋭いと思う。本来岡田監督は、『指令塔』等ともてはやされながらも、自らのスタイルに 拘り過ぎる「(AERAより)という中田やメンバー全員をうまくコントロールしてくれる存在としてのベテランを期待してたのかも知れない」。

言われてみると、確かに同じゴールを決めた後でも、一人で踊っているカズよりは、最終予選の時 に下にカズのユニフォームを着ていた事を観客に大きくアピールしていたゴンの方が、何となくチーム全体が明るくなりそうな気がする。

(出来る事なら全部引ッ剥がして本当に奥さんのブラジャーを着けていたか確かめたかった？笑)

どこかのビジネス誌ではこれからは相撲型(個人技)ビジネスよりもサッカー型のビジネスの時代、とか言ってたそうだが、その中で岡田監督がカズに求めた (であろう)「集団を上手くまとめあげて勝利を目指す」とか「ムード・メーカー的存在」というのは、僕らの一般的な環境ではおいそれと第三者に認められる 物では無い。履歴書にだってそんな事を書く所は無い無いし、そもそも日本には「将棋」という、決められた動きしか出来ない駒をいかに上手く使って相手を攻め落とすか、という伝統的な頭脳ゲームがあるではないか。(残念ながら筆者は極めて将棋はヘタクソですが)

過去五輪の場面でも、はた目には「メダルも取れなかったのに？」と感じながらも「自分の精一杯の力を出し切れた」と涙していた光景が数あった。とても素晴らしい事だったんだと思う。自身の人生の中で後先考えずに、「今」一瞬の為に完全燃焼出来る 瞬間にどれだけ巡り合えるだろうか。例えば結果が残せなくても、その瞬間を迎える 事が出来ただけでも幸せという物ではないか？

でもそんな精神論はサッカーには通じないらしい。それを観戦する側も察知しなければ行けないという事なのだろう。個人の個性がやたらもてはやされて来たが、その個性を集団の中で、いかに「目的」に向かって生かすべきかを各々が考えなければいけない、チームプレーの中に「ベテランのプライド」とか「個人のスタイルの拘り」を出そつとせず、チームの勝利の為に自分を捨てられる事が大事な時代なのだと思う。

(98年6月16日)